

廣池千九郎の『道徳科学の論文』における 心づかいに関する一考察 その1

Bayasgalan Oyuntsetseg

目次

1. はじめに
2. 『道徳科学の論文』における心づかいの特徴
3. 今後の研究課題

1. はじめに

筆者は、モンゴルが社会主義体制から議会制民主主義に転換していく1990年代に大学を卒業した。国家体制が変化する中で、新しい社会に生きる個々人は主体的に考え、行動する力が求められるようになった。教育分野で大きな改革が起こり、従来の暗記中心の指導方法の見直しが始まった。それと同時に、貧困や失業、ストリートチルドレンなど、様々な問題が起きていた。筆者の大学での専攻は国際関係学で教育分野ではなかったが、孤児院や児童保護施設でのボランティア活動をきっかけに、子どもの社会性の形成や道徳教育について興味を持つようになった。その後、日本に留学し、日本、韓国、中国、モンゴルの道徳教育について研究してきた。そして日本留学の経験から示唆を得て、モンゴルで道徳教育の授業研究や教材開発などを進めて現在に至っている。

2013年5月からは客員研究員としてモラロジー研究所に在籍している。大学院時代、日本道徳教育学会で発表した際に、当時モラロジー研究所の客員研究員であった韓国人の洪顕吉先生からモラロジーについて教えて頂いたのがそのきっかけだった。

研究所では若手研究者らと共に、主に廣池千九郎の『道徳科学の論文』を毎朝輪読しながらモラロジーについて勉強してきた。『道徳科学の論文』は、1928年に初版が刊行されていることもあり、最初は日本語が難しかったが、皆にいろいろな質問をしながら議論を深め、少しずつ自分なりに理解できるようになった。『道徳科学の論文』は道徳に対する自分の視点を問い直す上で貴重な示唆を筆者に与えてくれた。

廣池千九郎の『道徳科学の論文』では、日常生活のあらゆる場面で知性を磨き、「品性完成」という究極の目的と明確な意思を持って、心づかいを前向きに変えることに重点が置かれている。人間の精神作用および行為の因果律を重要視し、人生で最も望むべきも

の、どのようにして人とつながるのか、人の存在価値は何か、本当の幸せとは何かについて特色ある理論を展開している。そして、人間がどのような心づかいを持っていれば健康で幸福な人生を送れるか、その心づかいと行動についてが書かれている。人生の出来事は偶然に起きるものではなく、その原因は、心の中にあるとするのである。

道徳的行為を支えるものは何だろうか。道徳的行為が生起する理由は多様である。たとえば、恥、同情、罪悪感、社会的な賞賛への期待、報酬への希望、持久力、忍耐力、公平さ、決断力、共感力、思いやり、謙虚、誠実さといったものが挙げられるかもしれない。『道徳科学の論文』では、筆者の言葉でまとめて言及すると、自己の肯定、不完全さの自覚、自然の法則、穏やかな性質、人間関係、家族愛などについての解釈に独自性がある。これらの概念は、最高道徳の行為がどのように生まれるかを把握する上で重要な知見を提供する。考え方や感情の持つ役割を理解することは、道徳実行の動機、目的、方法を検討する上で必要であり、また示唆を得るところも少なくない。そこで本稿では、これらの概念に基づいて『道徳科学の論文』（以降、『論文』という）における心づかいの特徴について考察することを目的とする。

2. 『道徳科学の論文』における心づかいの特徴

(1) 自己の肯定

人は自分自身に対して肉体的、社会的、精神的な面で多くのことを実感しながら、さまざまな自分の能力について自己評価を行っている。そして自分のあらゆる行動を通して自分に対する肯定的及び否定的なイメージを持たざるをえない。それ故、自分のことを何者と考えるかはとりわけ重要な事柄でもある。

『論文』では、自己肯定感が「伝統」によって引き出されている。ここでいう伝統とは、恩人の系列ということであり、「人間の精神を開発もしくは救済して、人間に安心立命を与えたいという公平にして且つ偉大なる伝統の前系列にある人々」（七冊目 p.273）をいう。伝統は自分が暮らすコミュニティ（家族、所属先、国家、世界）がどう構成されているか、自分がどういう位置にあるのか、どのように関係を維持していくかについての行動指針を与える。伝統に関する考え方（自分が受け継いだ命の大切さなど）は、自分という存在そのものを好ましいものと感じさせ、より良い方向へ進もうとする動機付けを与え、自分のよさに気付かせ、自分を成長に導いてくれる。これまでの生き方、あるいは、これからの生き方を含めて、今の自己を肯定的に捉えているか否かによって、自己像や行動が変わってくると思われるのである。

伝統を通じて生まれる自己肯定の効果として、少なくとも次の五点が挙げられる。

① 人生を導く肯定感

伝統とつながっているという自己像による肯定感は、自分が目指すべき目標をはっきりさせる。人間は目標に向かって努力することで自分を磨くことができるものであり、道徳を実行するに当たっても目標を持つことがとても大切となる。『論文』における伝統に関

連する目標は、親や祖先、先輩、自分の所属している団体に誇りを持つこと、彼らと同じように自分もなれるのだという思いだけではない。ここでは必ず道徳が問われる。なぜならば、自分の先祖代々が義務先行（道徳的行為）をした結果、自分がその恩恵を被っていると考えるからであり、まず「自分が前の代からして頂いた」ということ、その次に自分が義務先行をするということに重点が置かれるからである。自分のすべての境遇は、自己の伝統（父母や恩人など）、過去からの賜物でもあり、自分の現在の精神作用の結果でもある。このような視点からみれば、自分は未来に対して徳を残し、伝統をつなげる人間として肯定的に捉えられる。このような自己の肯定は、伝統の「系列に列する」（七冊目 p.313）、「伝統に立つ」（七冊目 p.349）、「系列に入る」（七冊目 p.254）というような動機付けを与え、道徳実行の動機付けを高めると考えられる。そして、道徳を実行し、恩人と共通の心づかいでいたいという志は、具体的には、「精神伝統の真の流れを汲める」（七冊目 p.362）、「伝統の一人となる」（七冊目 p.348）と表現されるように、「正しい心づかいを持ち、至誠を持って他人に接したい」、「代々からのつながりを大切にし、未来につないでいけるような生き方をしたい」、「伝統に安心してもらえる人間になりたい」という志となって人間関係を大きく変えていく。このように、自分の価値が伝統の中にあると考え、伝統と自分を同一視することが特徴的である。

② 自己の存在を意味づける肯定感

自分のよさに目を向け、自分を大切に思うようになる。自分の命は、先人がつないでくれたものであることに気づき、自分がどのような人柄であれ、伝統につながっているという真実を理解することは、自分を大切にする上で重要なことである。『論文』では、伝統は人間の存在を意味づけ、自分の存在意義や立場を認識した上で、それを感謝して喜び、価値あるものとする感覚を高めることの大切さを教えている。日々の生活の中での失望や悲しみに替わって、感謝の気持ちや自己の肯定感が次第に大きくなっていく。「伝統の系列に列する」などの前向きな目標を持つことによって、自分が持っているネガティブなところ（人間関係が苦手等）を直していくことができる。そして、このように自分について良い感情を抱くことが、自分を評価し、自分を好ましく思い、自分を大切に思うことに繋がる。

③ 自他共に生かす肯定感

伝統本位による自己の肯定感により、人間には周りのものも生かそうという発想が生まれてくる。自分が生かされているありがたさを知ると、他人のためになることを考え、他人に対する思いやりが生まれる。他人のよさにも目を向け（相手にも伝統があり大切な存在であることを自覚し）、自他共に認め合うようになる。こうした姿勢に自己の肯定感は深く関わっていると思われる。

④ 自己を客観的に見つめる肯定感

伝統は、価値観の共有や伝達など、生きる上での大きな支えとして道徳実行を自発的に動機づけるものであるから、伝統本位による自己の肯定は、相手からの相対評価の結果として存在するものではなく、他人の評価如何によって容易に変わるものでもなく、また、

自分の努力を誇るものでもない。

⑤ 世代間の繋がりを意味づける肯定感

伝統本位による自己の肯定により、人は現在の活動と将来の子孫の運命との関連性をより強いものと受け止めることができる。『論文』では、「最高道徳を実行したならば、その子孫万世一系に富貴を保持する」(七冊目 p.268)、「自然の法則に従うた人の子孫が万世一系に永続する」(七冊目 p.197)、「伝統の原理を体得した人の運命が永久性と末弘性とを帯びてその子孫に至るまで繁栄する」(七冊目 p.276)、「最高道徳実行の結果は子孫万世一系に続く」(六冊目 p.416)、「自家の永久性と末弘性とを得るように心がくべきでありましょう」(七冊目 p.371) というように、人間の大切な役割は、次の世代がより良く生きられるように徳を残すことにありと教えおり、家の永続と繁栄を道徳の結果として考えているところに特徴がある。各自の道徳は必然的に子孫や家を繁栄させ、道徳が家の永続に主な役割を担うことになる。道徳は家の存続のための強力な手段となるのである。

(2) 不完全さの自覚

上記の自己の肯定には、自己の不完全さの自覚という重要な概念が同時に含まれている。次に、不完全さの自覚について見てみたい。『論文』では、「贖罪」「借罪返済」という語が用いられている。一般に贖罪とは自分の犯した罪を償うことを指すが、本稿ではそれを「不完全さの自覚」と表現して用いている。ここでいう不完全さの自覚は、単に自分の欠点や短所、弱さを認めるという意味だけではない。それは自分の精神や行動をかえりみ、より良い生き方(道徳的実践)を志すものである。このような不完全さの自覚は、自分に問いかけたり、自分の価値観を再認識したり、価値の自覚を深めたりする上で重要だと考えられる。そこには、人生を見つめなおす、自分自身の考えに向き合う、自分を戒める、自分を律する、学び続ける、謙虚、自責などの意味も含まれている。

不完全さの自覚は、裏を返せば、ネガティブな考え方として受け取ることもできる。しかし、これは単なるネガティブな考え方ではないし、自分を責めたり、自己評価を減損したりするものではない。

『論文』では、「道徳実行の動機と目的は、自己の過去における過失や罪悪の解脱に存在する」(七冊目 p.4)、「自己の過去における贖罪のために自己の利己的精神を改めて真の慈悲心となる」(七冊目 p.121)、「過去の贖罪のためとして真の慈悲心になって、最高道徳的に一切の事に対して努力する」(七冊目 p.129)、「自己の品性の完成は、第一に、自己の過去における贖罪を含む」(九冊目 p.281)と述べている。道徳の実行は自己の過去における贖罪のために行なうものという考えに基づいており、それはつまり、自分の行動や心づかいに罪があると感じる「不完全さの自覚」がその基礎に置かれているといえる。このような、不完全さの自覚は、「困っている人を助けなかった」など、悪いことをした時に感じる一般的な罪悪感とは異なるように思われる。

『論文』における不完全さの自覚には、以下のような三つの特徴が見える。

① 人間が弱い存在であるという認識に基づいた不完全さの自覚

「最高道徳実行の動機及び目的は自己の過去における過失もしくは罪悪の解脱を期するにある」(八冊目 p.191) というように、不完全さの自覚は、一時的に抱くものではない。なぜならば、不完全さの自覚は、意識化された特定の行動だけにかかわるものではないからである。むしろ、不完全さの自覚は、「最高道徳的行動をなすのは、自己の過去において無意識的もしくは意識的に犯せるところの罪を償却するためであるという精神作用をもって行動する」(九冊目 p.236) というように、「無意識的に」起こした過ちに対するものである。「無意識的に」起こした過ちは、はっきりと自覚できるものではないが、自らを見つめ、振り返り、自分の内心への問いかけを促す。これが「借財返済」という概念に繋がっている。この考えは、自分を戒める上で何らかの助けになると思われる。更に、不完全さの自覚は、常に意識すべきものである。「わが心の中には深く自己の徳の足らぬことを反省して、温和なる精神作用で行動しておらねばならぬのである」(七冊目 p.408) というように、不完全さの自覚は、道徳を実行するために必要とされる、永続的な意志のようなものである。

② 世代間の過失を包含した不完全さの自覚

不完全さの自覚は、他人の評価や意見に左右されるものではなく、個人の体験や言動だけでもなく、祖先にまで遡るものである。そして自分も含めて祖先もまだまだ不十分という謙虚さを不可欠としているように思われる。「自己の不完全なる先天的及び後天的原因に基づけるところの自己の精神を棄却する」(七冊目 p.192)、「最高道徳を行うことは自己及び自己の祖先以来の過去における贖罪であるという精神作用になる」(八冊目 p.222) などが挙げられる。『論文』では、伝統(祖先)と自分を同一視するので、過去の過ちも、祖先に至るまでの長いタイムスパンで見ようとしているのが特徴である。

③ 自己を厳しく律する不完全さの自覚

『論文』における不完全さの自覚の概念では、問題に立ち向かう姿勢が重視される。問題を乗り越えたかどうかはその次の問題である。どのような状況で自分の不完全さを感じるかは、その人に内在化された規範意識やモラルによって異なってしまうものだが、『論文』における不完全さの自覚の捉え方(祖先や自分に意識的・無意識的に起こした道徳的な過ちがある)は、あらゆる人を道徳的行為へと十分に動機づけると思われる。ある人にとって善であったことが、他の人にとって悪に思えることもある。周りが道徳的だと捉えていても、自分ではそう感じていない場合もある。善悪を決めるのはその人の心や考え方次第であると考えれば、不完全さの自覚もその人に内在化されたモラルや規範意識によるところが大きくなる。その他に、何か問題が起きたとき、自分が正しいと思い込んだり、他人の欠点ばかりに目が行ってしまったり、自分が悪い時があってもそれを見ようとしなかったり、言い訳をしたりする人もいる。あるいは、自分に異を唱え、反抗的な態度の人に対し、それを否定する態度で臨み、攻撃したりする人もいる。仕事やうまくいかない場合、その原因を他人に求める人もいる。それに対し、『論文』では、たとえその原因は、他人にあるにせよ、自分自身が主たる原因であると考え、相手と自分のどちらに非

があるかという判断よりも、不完全さの自覚によって自分の悪いところを直視しようとする。とはいえ、それは単なる自己卑下には当たらない。なぜならば、不完全さの自覚は、自己肯定の基礎の上になされるものだからである。

(3) 自然の法則

自然の法則は、一般的に、人間の行動とその結果の必然的な関係（因果）を表す法則として知られているものだが、『論文』では、天道、天地の法則、天命、大宇宙などが同義語として用いられている。その他にも『論文』では、「宇宙自然の法則は神の意思の表現と称せられている」（一冊目 p.110）、「神と宇宙と自然との同一なる」（七冊目 p.247）とあるように、自然の法則は「神」という言葉に置き換えられ、「神の意思」、「神意に同化」、「神意に従う」、「神意を体得する」、「神意のとおりを実行する」、「神意の実現」などの表現が用いられている。それ故、自然の法則は、理屈では分かりにくいものになっているところがある。「最高道徳にては、神に対して自己の今後における精神及び行動を神意に合致するようにいたしますということを誓う」（九冊目 p.404）、「利己的本能を断除してもって神意に同化し、最高道徳の基礎の上に立って至誠慈悲及び自己反省の実行をいたす」（九冊目 p.105）、「われわれが万事に成功せんとするには、必ず神意に従って最高道徳的精神と行為とによらねばなりませぬ」（九冊目 p.417）、「最高道徳の精神は神の心に適従することである」（七冊目 p.245）などが挙げられる。しかし、ここで問われていることは、神が実在しているかどうかという問題ではなく、自然の法則を信じて「道徳を実行しよう」というように動機付けられるかどうか、どうすれば「より価値のある人生を送ろう」という意志を持てるかということである。

『論文』における自然の法則（あるいは神）に関する観念には、少なくとも次の五つの深意があると解釈できる。

① 良心としての自然の法則

自然の法則は「良心」に譬えることができる。自分の言動を自然の法則、すなわち神意に合するか、反するかという視点で見るということは、とりもなおさず自然の法則が人間に内在する価値観や規範意識であって、「良心」と同様な役割を持つものであることを意味すると考えられる。自然の法則の存在を信ずることは、「人間の精神作用及び行為の因果律は物理学的法則と同じく、甲の原因は甲の結果を生じ、乙の原因は乙の結果を生ずる」（八冊目 p.269）を信ずることと同じである。「精神が真に自然の法則（神の心）に適わぬ場合、徳を積むことが出来ぬ」（七冊目 p.97）、「天地自然の法則に反するものは退化する」（七冊目 p.370）などが挙げられる。これらの表現から自然の法則は、人の心の中にあるものと考えることができよう。

② 人生の指針としての自然の法則

自然の法則は、人間を幸福へと導くものであり、道徳的な生き方の指針である。自然の法則は「本体」としても表現されるが、その本体を、人間の最上位に位置する理想的な「人格者」、最高道徳の実行者として、人格的にみている点に特徴がある。本体は、道徳実

行の模範を示し、道徳的行為を促す存在なのである。『論文』では「自然の法則に従うた人が偉大なる人格者となり」（七冊目 p.197）、「何人もその精神の向上によりて品性の向上を生じ、その品性の向上はついに聖人もしくは聖人以上に進み得る」（七冊目 p.259）と述べている。

③ 自己からも働きかけのできる自然の法則

自然の法則は人間の行動の良し悪しに応じて結果をもたらすが、人間も自らその働きを助けることができる。例えば、「天地を感動させる」というように、人間が積極的にその働きを助けるという概念は、『論文』に見られる特徴的な概念である。「人間が天功を助くる」（七冊目 p.270）、「宇宙の一つの成員として、宇宙の万物生育の事業を助くるためであるという精神作用をもって、一切の事に当たる」（七冊目 p.20）、「道徳上の価値は実に偉大であって、天地を感動せしめ得る」（七冊目 p.116）、「至誠心が徹底して、天地をして感動せしめる」（六冊目 p.223）、「功利的精神による事業は成功することがありますが、真に天地を感動さするとき好結果は得られませぬ」（七冊目 p.121）、「形式的且つ物質的な道徳は天地を感動さするほどの力はない」（八冊目 p.259）などが挙げられるように、それは「人間の道徳的な生き方」が天の望みであるという考え方に立脚している。

④ 善として身につけることができる自然の法則

自然の法則、すなわち神の心は、遠くにあるものではなく、慈悲、至誠、愛などを意味しており、人間が身につけることができるものである。『論文』では、「神の心を体得する」という表現がよく用いられる。「聖人の教えに従い、神の心を体得して慈悲となり」（九冊目 p.289）、「最高道徳は終身努力し且つ終始神の心を体得して人を愛するのである」（九冊目 p.377）、「諸聖人は神の心を体得して、その真実なる慈悲心の上よりその実行を希望せられておった」（四冊目 p.257）、「神の心を体得して自己の品性を造る」（五冊目 p.8）、「神の心を体得して、慈悲且つ至誠の心となりて努力すれば、人類の幸福は支えらるる」（六冊目 p.224）などが挙げられる。

⑤ 道徳実行を促がす自然の法則

『論文』における自然の法則では、道徳実行の動機を重視し、行動の結果、得られる利益や効果を主としない。例えば、「徳を積む」という概念を例に挙げれば、徳を積むことのみを目的とした行動は「功利的」（七冊目 p.120）と評され、その人は自他の品性を向上し、好果を得ることが出来ないという。そこには、過去の自分の過ちなどを良い行いによって補いたいという消極的な精神が求められるのである。また、相手のために思う至誠がないと、好結果が得られない。「精神を最高道徳的に改めたならば、その至誠また天に通じて、おのずから絶大の幸運を開く」（七冊目 p.26）、「至誠天に通じて予想外の運命を開く」（九冊目 p.238）などが挙げられる。このように、自然の法則に関する考え方は、非常に特徴的であり、教育的な要素を多く含んでいる。

(4) 感謝

一般的に感謝は自分に与えられたものをありがたく思う感情である。それに対し、『論

文』における感謝には、次のような特徴がある。

① 他者の苦労に対する感謝

『論文』における感謝は、「他人に助けもらった」など、他人から間接的・直接的に受けた私的恩恵に対する感謝ではない。このような感謝は、二義的なものである。最も大切なことは、伝統を継ぐ人々の努力と苦労に対する感謝である。『論文』では伝統を受け継ぐ人々の苦労が「今日の文明と今日の人類の幸福を生み出す原動力」（七冊目 p.272）となっていること、「伝統に対する報恩の原理」は「世界諸聖人及びその伝統を継げる人々の苦労に対する感謝の表現」（七冊目 p.272）であり、「人々の苦労に対して感激の情の起こる人にして、はじめて報恩の実行が出来る」（七冊目 p.273）としている。ここから、感謝の気持ちは、人々の苦労の結果として自分が存在しているという認識（理性）だけではなく、感情や感激も必要とされていることがわかる。このような心づかいは、「単に自己が世話を受けたというだけの精神にてある人を恩人とするのとは、その差、実に大きい」（七冊目 p.273）という。

しかしそれは、親しく交わる人々に恵まれていること、彼らに愛を注いでもらった、すこやかに育ててもらった、他人から具体的に利他的行動を受けている、困っているときに助けられている、自分が恵まれた状況に置かれている、周りの人に支えられて来た、というような他人から頂いたものに対する喜びや満足の感覚ではなく、むしろ苦労に対する感謝の思いが強い。『論文』では、感謝の気持ちは具体的な行動の基準として提示されている。それは「報恩の原理」と呼ばれる行動基準である。

② 世代を貫く価値観に対する感謝

この感謝の情は、前の世代から引き継いだものを、次の世代にゆだねていく希望であり、人との関係に安らぎを見出すことのできる感謝の情であると思われる。感謝は世代をつなぎ、道徳をつなぐ。世代のつながりは、経験や知識のつながりより、道徳のつながりである。父母の愛も、子どもに引き継いだ道徳の視点で語ることができる。価値観の共有が感謝しあえる、親密な関係を深める。

③ すべてを温かく包む感謝

『論文』における感謝は、如何なる運命も受け入れ、感謝できる、許容力の大きい心づかひである。これは「自ら運命の責めを負うて感謝す」（九冊目 p.286）という格言に表されている。『論文』では、「すべての境遇」を自己の各伝統（父母その他の恩人）の賜として、満足し且つ感謝しつつ努力すること（七冊目 p.175）、「自己を没却して、最高道徳的に努力を続け、且つこれは先輩の苦労の結果で、自分がかかることを知り、しこうしてここに至ったのであると考えて、すべての伝統に対してその大恩を報ずることを心掛ける」（八冊目 p.223）、「外部から来た原因にても、その責任は自己にて負わねばならぬ。自己の境遇の不満足に対して自暴自棄するということはいよいよ愚かである」（九冊目 p.362）、「叱責を蒙る場合にも、不平を懐かぬのみならず、一々これを感謝して更に深く自ら反省し、誠を尽くして奉仕せねばならぬ」（七冊目 p.204）と述べている。これらは、自分の存在を意味づけ、全ての境遇に対し感謝を抱き、他人を大切にしながら生きたいという心

づかいである。また、これらには、自分の存在を恩人との人間関係の中に見出すことを通じた、自分の周りの人々との関係に対する感謝という意味も含蓄されている。このような心づかいで感謝できるならば、人は幸福を見出せると思われる。完璧な人生はないと言われるが、どんな境遇も受け入れ、感謝ができることは容易ではない。それには慈悲、勇氣、知恵など多様な資質が必要とされるであろう。感謝できるからこそ、人は不道徳な出来事や人間に遭遇した時に、排斥や怒りなどの感情を抱かないように自分を導き、相手を感化するなど、より建設的な行動をとるように促がされ、善行へと動機づけられるのかもしれない。この意味では、『論文』における感謝の意義にはとても深いものがあると思われる。

④ 自己成長への感謝

自分の内面や自分の精神作用をみつめることが重要視されるのは、道徳の実行は自発的であって、他から強制されるものではない。これが最も端的に表現されているのが「する」ではなく「させていただく」という言葉である。『論文』では「すべて自己のためなるが故に、特に謙讓の意を表さんがためである」と述べられている(七冊目 p.46)。さらに、「最高道徳では、一切の道徳的行為を、「他人のためにこれをする」といわずして、「自己のためにこれをする」というのですから、「してやる」といわずに「させてください」とか「させていただく」とかという」(七冊目 p.129)と述べられている。具体的な行動で言い換えれば、誰かに対して親切な行為を実行できた場合、自分に対しては親切を実行できた自分に感謝し、相手に対しては自分に親切を実行させて下さったことに感謝することになる。このような心づかいであれば、たとえ相手からの見返りがなくても相手に感謝できる。このような考えは、人間としての成熟に欠かせないものであり、周囲の理解がなく、困難な状況になっても正しい行動をとりつづける原動力になる。そして、このような心づかいは、自分も周りも幸せにするとと思われる。

(5) つながり

自分と他人とのを結びつきについて理解することが道徳実行の動機に大切である。他人が嫌がる行為、他人を傷つける行為などを避ける上で大切な基準は、人々とのつながりを如何に意識するかによる。つながりの意識は、家族や親戚、他人との親しさを深める重要な意識である。

『論文』におけるつながりに関する定義には、次のような特徴があるように思われる。

① 礼式を超えたつながり

『論文』では、つながりの意識は礼式に基づいた「交際的道徳」と異なるという。交際的道徳とは、「礼式を重んじ且つ交際を尊びて他人を大切に扱うことは実に道徳心の現れである。しかしながら、下のは上のもに諂諛するためにみだりに礼儀を過用し、また上のは礼儀を口実にして下のもに人格を無視し、傲慢無慈悲の行動をあえてする」(四冊目 p.207)と述べられているものである。従って『論文』におけるつながりの意識は、他人の心を感じ取る共感を必ずしも必要としない一方で、他人の心を認知的に

理解し何らかの反応（応援や援助など）をすることに留まるものでもない。

② 制約のないつながり

『論文』におけるつながりの意識は、類似性から生ずるものではなく、制約がない。換言すれば、同胞、仲間としての他人、自分の意見、思想と類似性のある他人など、その他人は誰なのか、どのような状況要因があるのか、といったつながりの意識を制約する要因に囚われない。そのため、他人が自分にとってどのような人であるかによって、その人物への態度が異なることはない。限定的な集団の中だけではなく、所属集団を越えて広く共に存在することを考えるつながりの意識であるといえる。

③ 道徳を共有する世代間のつながり

つながりの意識を特徴付けるものは、「伝統」の概念である。自分の親とのつながりだけでなく、親の親、そして、その親というように、長い縦のつながりががきわめて重要な位置づけにある。それ故、幸福も当事者本人だけでなく、子孫に至るまでの幸福を如何に継続させるかについて教える。そして、自己の現世における精神作用と行動の善悪と、祖先の善と悪などの因果関係に重きを置くところに特徴がある。一個人の中に、親だけでなく、祖先も、子孫も含まれていて、一体的になっているのである。この一体的なつながりの中で、「義務先行」や報恩の精神が語られる。道徳は「過去」から「現世」、そして「未来」へと広がっていく。精神作用の効果も「祖先」から「個人」、そして「子孫」まで続いていく。この視点が各個人の道徳意識を高めるのに大きな力があるように思われる。

④ 自他を大切にするつながり

「自ら苦勞してこれを人に頒つ」（九冊目 p.318）というように、自分が苦勞して自分がその結果を享受しようとしないうところにもつながりの意識がある。自分の幸福は、自分の努力の結果であるとせず、他人とのつながりの中で、すべてを見ているのである。

つながりの意識は、自分を生かし（愛し）、他人も生かす心づかいである。自分も生かされていること、他人も生かされていることに対しつながりを感じるのである。

（6）穏やかな性質

日常の中ではどんな人も、悪い行いをする他者に対する怒りや拒絶、攻撃などの感情が喚起されることがあると思われる。怒り、嫌悪、攻撃などの感情は、他者に怒りを向けることで他者を正すことができるので、道徳的な行為とみなすことも可能である。

しかし、『論文』では、精神作用に主眼が置かれるので性格も道徳として捉えられる。その代表的な性格は穏やかな性格である。その穏やかな心は、他人の過失・欠陥もしくは不正を挙げ、これに対して不平を懐くようなことはないものである。『論文』では「不平の精神作用あらばかえってその人には他人を批評する資格はない」（八冊目 p.240）としている。では、自分の精神を乱さないその穏やかな心はどこからくるのか。それは「伝統尊重」、「人心救済」、自己への慈悲などの概念に深く関わっているように思われる。

① 「伝統尊重」の精神から生まれる穏やかな性格

人間は、恩人に対する尊重の精神を持つことによって穏やかな性格になる。人間は、精

神作用と行動との間に因果律が存在することを理解し、恩人の苦勞に対する感謝ができるようになれば、精神が安定し、心は平和・安心で満たされるという。「人間は伝統尊重の觀念が出来るときには慈悲、温和などの美德を具備するに至る」（七冊目 p.381）と述べるのである。ここでいう温和は、「緩急の際、もしくは自己の恐れ敬うような人のおらぬ場合に当たっては、自己のわがままを押し通そうとする我慢心の強き人の形の上での温和とは異なる」（七冊目 p.200）ものである。

② 「人心救済」の精神から生まれる穏やかな性格

人心救済とは「聖人の実行せられた道徳を、まず自己自身に体得し且つ実行して、その自己の精神及び行為を他人の精神に移植して、自他の精神を根本的に改善することである」（八冊目 p.193）、「他の過失もしくは不正に対して、公然これを批難もしくは攻撃することはせぬのである。万一、他人の過失もしくは不正を見聞したならば自己に反省する」（九冊目 p.326）。このように、人心救済は道徳的行為の一環なのである。『論文』では「道徳実行の動機と目的を万物生育の精神に置けば、いかなる場合でも不平の心は起こらない」（七冊目 p.21）、「他人に不平を懐かせ、もしくは怪訝の念を起こさするとき行動あらば、その人はたといかに深く最高道徳を信ずるも、いまだ最高道徳にて真に救われた人と称することは出来ない」（八冊目 p.246）、「慈悲の心になり人心を開発もしくは救済して自己の最高品性を完成しようという無欲な消極的精神から落ち着くのである」（八冊目 p.335）と述べている。

道徳実行の動機は、「自己本位」（自己の名誉や利益）に基礎を置いていないので、相手が自己の感情や気持ちに合うか合わないかということから解放されるため、温和の精神でいられると解釈できる。その際、相手の反応に対する受け止め方も重要である。『論文』では、「相手方がその精神に感ずるか否かは別として、己自身は常にかかる精神を持って行動する」（七冊目 p.92）ことが重要であり、「人心救済（開発を含む）の実質そのものは、他人のなすことを不快に感ずることなく、不平を起こすことなく、且つ他人を排斥することなく、一切の事を自己の徳の足らざるところに帰してこれを自己に反省し、真の慈悲心をもって他を愛することである」（八冊目 p.209）と述べている。このように、他人の状態に左右されず、全てを落ち着いて受け止めることが肝心である。その結果、人間が穏やかになり、道徳を実行したいという心づかいになれるのではないと思われる。ここで注目すべきことは、このような人心救済は誰かのためというより、「自分の品性を向上する」という姿勢で取り組むことである。このような心づかいが、人を温和にすると思われる。

③ 自己への慈悲の精神から生まれる穏やかな性格

自己への慈悲は、自分自身を愛することである。自分を大切にすることは、感情的になったり、腹を立てたり、自分を傷つけたりするような感情を抑えることにも繋がる。『論文』では、困ったことや悩みごとが起こった場合、自分の肉体を害することなく、且つ他人の感情も害することがないように、動揺や怒りなどの感情をコントロールする大切さについて述べている。この自己に対する慈悲は、同時に、怒りや軽蔑などの感情で他人

を拒絶したり攻撃したりするといった感情を抑えるものと思われる。

④ 感情に振り回されない穏やかな性格

『論文』では、道徳に感情を持ち込まずに、客観的に判断できることの大切さについて教えている。「同情・親切・憐憫もしくは義侠心に基づきて、弱者を偏愛し、その結果、強者を悪みこれを挫かんとすること」を「感情的道徳」と定義している（四冊目 p.210）。この定義から、感情が入り込む場合、良し悪しは相対的なものになると考えることができる。たとえば、極端に言えば、自分が好きな人のために何かをするという行動が道徳的行為ではないということになる。好きだから、嫌いだからという感情から発する行為は「道徳」として不十分であるということになる。

3. 今後の研究課題

本稿では、『道徳科学の論文』における道徳実行の心づかいについて、自己の肯定、不完全さの自覚、感謝、つながり、穏やかな性質を中心に考えてみた。これらの概念には、道徳とは何を意味するのか、人間にとって何が一番大切か、その大切なものを大事にするためにどうすればよいのかなど、人間の生き方の参考になるさまざまな気づきが含まれていた。そこから家族との付き合い方、人間関係を構築し、周りの人といいい仕事をするための心得がみえてくる。また、自分の生き方をかえりみ、自分の存在を大事に思うことの大切さについて考えさせられる教えが多々あった。

たとえば、因果律についてである。世間一般では「自分の行動の結果を自身が受ける」と考えられている。道徳教育でも道徳実行の効果について「自分の悪い行いや良い行いの結果が、自分に帰ってくる」、「自分がされたくないことを人にしないように」という指導方法を用いることが多い。そのように教えてもらった子どもは、自分がされたくないことを気にして行動するようになっていくと思われる。これは確かに正しいのだが、その反面で相手を不愉快な気持ちにさせたくないというより、自分が嫌な目にあわされたくないという動機で行動するようになる子どもが生まれるかもしれない。このような道徳教育を通じて、ある程度の道徳を内面化し、一時的に幸福を得る子どもはもちろんいるだろうが、それとは別に、他人によく評価されたいために、形式的に道徳を実施し、道徳を自己の目的のための利用するものとして内面化する子どもも出てくる可能性もはらんでいる。たとえば、他人によく評価されたいがために行う道徳である。『道徳科学の論文』からみれば、いかなる善事をなしても、その精神が自分にとって損か得かという自己中心的なものであれば、道徳として不完全である。

道徳は、自己の品性向上のためであり、「いいことをすればいい結果がでる」という考えではなく、「いいことをしたい」という動機に基づいてこそ、レベルの高い道徳になる。道徳を学ぶことは社会での対処療法を学ぶためではなく、『道徳科学の論文』でも述べられているように、周囲の事情の如何によらず自己の精神に道徳を体得するためである。

次に、感謝についてである。道徳教育では、「世話になった人に恩返しすべき」と義務

や義理に訴えるような指導方法を用いることが多いと思われる。これは、『道徳科学の論文』からみれば、一面には他人に対し同情や親切をなすが、その反面には、形式的な精神に立脚した不道徳な側面も持ち合わせている。人間関係で生じる礼儀作法などの義務という単純なものではなく、社会や人々からの恩恵に自発的に報いることの大切さを説いている。

ここに見えている大切な課題は、人間が幸福な生き方をするために大切なものは品性向上であり、心の持ち方であること、そして、道徳は自分から考えるものであり、自発性をどう喚起するかということである。学校現場においても、道徳は「上から教えるもの」ではなく、道徳実行の動機および目的が自発的なものになるために、教員一人一人が、道徳に関する基本的な考え方を確立することが大事であることを改めて考えることができた。

今後も『道徳科学の論文』における道徳実行の心づかいについて研究を続けていきたい。